

『沈黙の春』出版 50年記念 キャンペーン企画



Rachel C.

「私たちは、いまや分かれ道にいる。
…長いあいだ旅をしてきた道は、
すばらしい高速道路で、
すごいスピードに酔うこともできるが、
その行きつく先は、禍いであり破滅だ。
もう一つの道は、あまりく人も行かないが、
この分かれ道に行く時にこそ、
私たちの住んでいるこの地球の安全を守る、
最後の、唯一のチャンスがあるといえよう。
どちらの道をとるのか、
きめなければならないのは私たちなのだ」
（『沈黙の春』より）

レイチェル・カーソン（1907-1964）
アメリカの海洋生物学者。化学物質による環境汚染に
ついて、いち早く警告した。



ボランティアスタッフ募集中!!

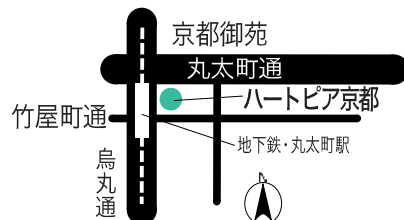
『沈黙の春』出版50年 記念フォーラム

『沈黙の春』発・ 未来へ

2012年は『沈黙の春』が出版されて50年目の年にあたります。
この記念すべき年にあたり、『沈黙の春』の現代的意義を考
えながら、私たちのライフスタイル、現在の社会経済シス
テムなどを見直し、未来へ向かう「別の道」を探求したい
と思います。

日時●9月17日(月・祝日)
午後1時30分～4時30分
会場●ハートピア京都
3F大会議室

京都市中京区竹屋町通烏丸東入る
地下鉄「まるたまち」5番出口



プログラム

主催者あいさつ

第1部 映画「花はどこへいった」上映

坂田 雅子 初監督作品

〈作品は裏面で紹介しています〉

第2部 ディスカッション「未来へ」

上遠 恵子（レイチェル・カーソン日本協会会長）

坂田 雅子（映画監督）

新川 達郎（同志社大学大学院教授）

参加費●500円

定員●200人

企画協力●京都映画センター・京都シネマ

主催●レイチェル・カーソン日本協会関西フォーラム

TEL075-251-1001 FAX075-251-1003

【E-mail】 JRCC@mb6.seikyou.ne.jp

※このフォーラムは平成24年度京エコロジーセンター環境保全活動助成事業として実施します。



ドキュメンタリー映画「花はどこへいった」の監督・坂田雅子さんが、フォトジャーナリストだった夫のグレッグ・デビスさんを肝臓がんで亡くしたのは、彼が入院してわずか2週間後のことだった。「彼の死は、米軍兵士として送られたベトナムの戦場で浴びた枯葉剤が原因ではないか」と友人から示唆された坂田さんはベトナムに行くことを決意する。そこで彼女が目にしたのは、戦後30余年を経た今も、枯葉剤に含まれたダイオキシンが、がんや生まれながらの障害を起こさせ、大地をむしばみ続けている、という現実だった。映画は、亡き夫の鎮魂にとどまることなく、ベトナムの人びとの家族愛と平和への想いを描き、ベトナム戦争と枯葉剤被害の実相に静かに迫る。



坂田雅子監督（写真右）／1948年長野県生まれ。70年にグレッグ・デビス（写真左）と出会い、結婚。写真家としてのデビスの仕事を手伝う傍ら写真通信社に勤務、98年にIPJを設立し社長となる。グレッグの死をきっかけにベトナム戦争で使われた枯葉剤を追い、ドキュメンタリー映画「花はどこへいった」を完成させる。最新作は「沈黙の春を生きて」。

エージェント・オレンジ

米軍による最初の枯葉剤散布は1961年のこと。目的は南ベトナム解放民族戦線のゲリラ活動に手を焼いたため、隠れ場所をなくし、食料の補給路を絶つことだった。散布後2時間で植物はしおれ、枯れたという。以降、枯葉剤散布は10年に渡って続けられ、約7200万リットルが撒かれた。そのうちの



4500万リットルがエージェント・オレンジ。他の化学剤と識別するため、ドラム缶に塗られたオレンジの帯から、こう呼ばれるようになった。エージェント・オレンジには人類が“発明”したなかで最も毒性の強い化学物質ダイオキシンが含まれていた。1兆分の1グラム（1ピコグラム）でも人体への影響が懸念されるダイオキシンが、ベトナムに撒かれた総量は450kgに及ぶという。

「花はどこへいった」から3年 坂田雅子監督最新作

ベトナムの戦場で使われた枯葉剤による被害は、実は使用した米兵にも広がっていた。ベトナム帰還兵の子どもや孫の世代にも被害が及んでいるのだ…。50年前の「化学物質は放射能と同じように不吉な物質で、世界のあり方、そして生命そのものを変えてしまいます。いまのうちに化学薬品を規制しなければ…」(『沈黙の春』)というレイチェル・カーソンの警告の言葉に再び耳を傾ける大切さを、映画「沈黙の春を生きて」は訴える。

京都シネマにて 上映予定

上映日程は京都シネマまで
Tel.075-353-4723

